

イエアワセノヨリドコロ



(新しい部屋を作りたいんだけど...)

(今日はこの料理を振舞おう)

(新しい仕切り作ったよ)

(雨でも外に出れるっていいね)

(覗めが良いな、ココ)

(今度このスペースでイベントできないかね?)

(ここはあそこで〇〇さんのライブだ!)

(このペンキを塗りなおそう)

(新しい仕切り作ったよ)

(このスペース、仕事はかどる。)

(〇〇さんの植栽、成長してるな!)

(ママ、なんか楽しそうなことしてるよ~)

(こここの部屋、空いたんだ!)

(ここはあそこで〇〇さんのライブだ!)

(このペンキを塗りなおそう)

(新しい仕切り作ったよ)

(このスペース、仕事はかどる。)

(〇〇さんの植栽、成長してるな!)

(ママ、なんか楽しそうなことしてるよ~)

00. 現代の根源的課題 01. イエアワセるヨリドコロ 02. 近未来の地方 03. 設定敷地 04. 地域と建築の持続可能な仕組み

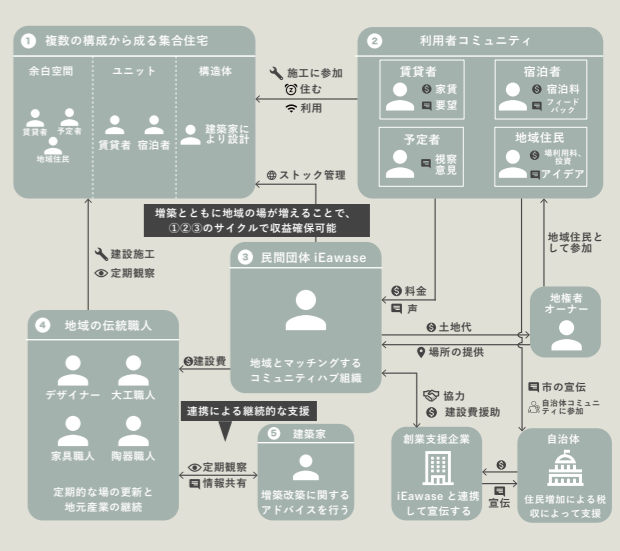
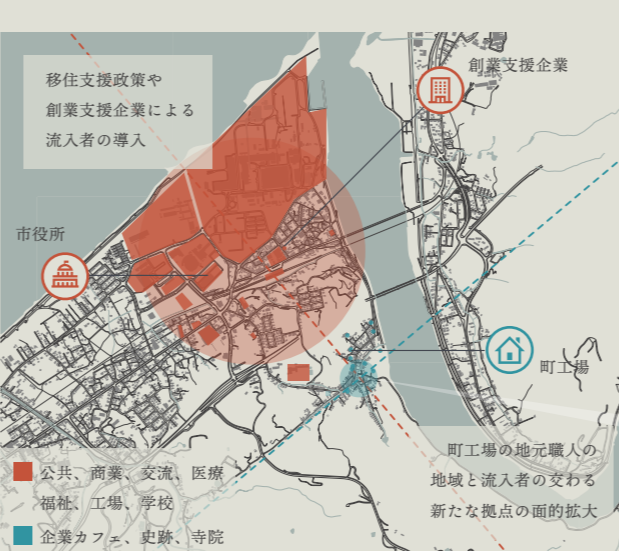
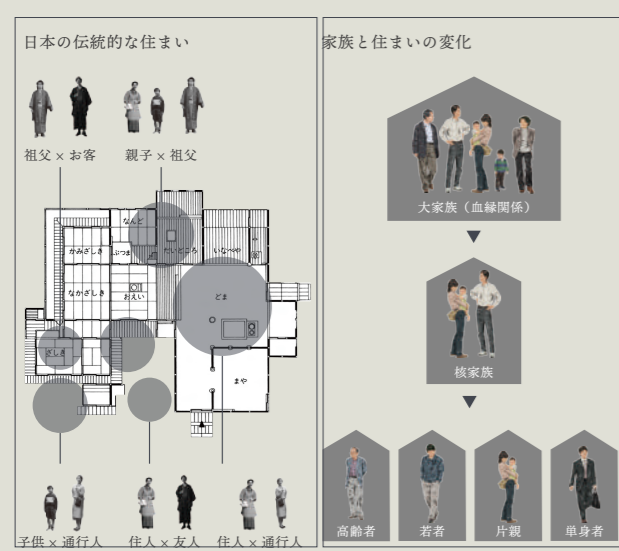
少子高齢化や生涯未婚率の上昇、家族世帯の変化、量産型住宅によって家族と住まいの関係にはズレが生じている。さらに個人化の促進、SNSにより常時接続された現代において、内外を壁で仕切る操作だけでは関係を断ち切れず、ひとりになることが困難化している。一方で多世帯の存在、伝統的な建築要素で構成されていた、かつての日本の住まいでは「居合わせること」を自動的に営んでいた。

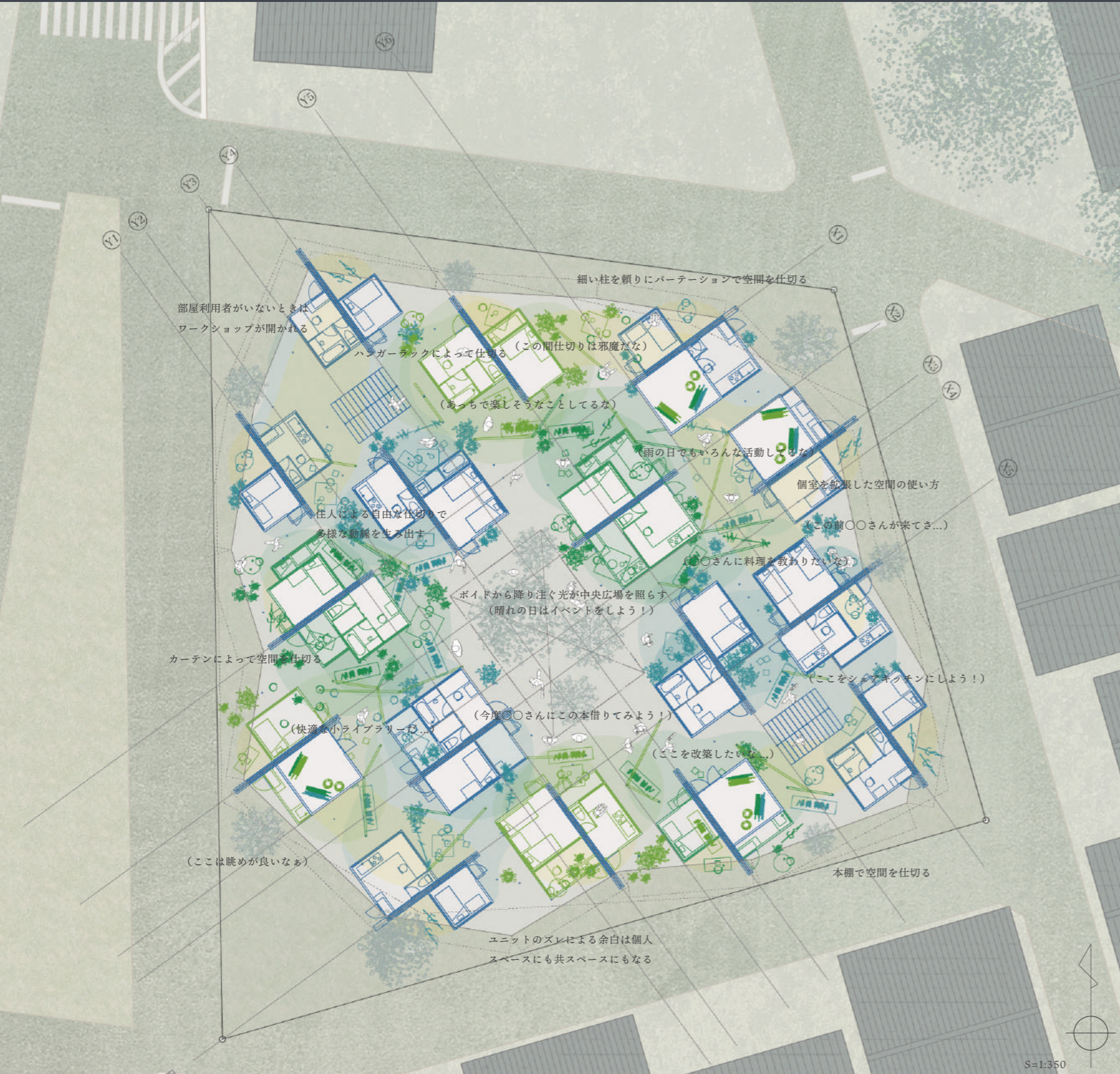
ちょうどその場にいる関係性、「イエアワセ」の関係を他者と持つこと。これこそが現代社会に蔓延る孤独による問題を解決するための手掛かりとなると考える。そこでかつての家族をパッケージ化していた「イエ」を再構築することで生まれる関係「イエアワセ」を僕たちは、現代における外との新しいつながりとして定義する。

ひとつのオフィスだけで働くことが前提の時代は変わりつつある。仕事場の自由化や移住支援政策により、未来の地方には外からの人口流入者の増加が見込まれる。対する現在の地方には、血縁に根付いた他者との繋がり方、伝統、それに伴う居住形態が存在し、そこに新しい仕組み、提案、建築の必要性を唱える。計画は島根県江津市本町地区の移住と伝統の二属性が交わる結節点を敷地とする。

本敷地は元来、江の川の舟運と北前船の寄港地として栄え、旧街道の景観を残し、石州瓦建築が連なる。社寺仏閣や近代建築が現存し、回遊性を持つまちでもある。また地域内では、人口減少や高齢化に対して早期から空き家活用や企業コンテストを通じた移住誘導が促進している。そこで僕たちは増加する流入者と住民が交わる場としての居住空間の提案をおこそう。

建築家により構造柱を含めた建築フレームを竣工する。住民から始まり、流入者、時間利用者等の多様な要求に応じて建築は変化していく。建築の余白は地元職人が手掛けた家具により仕切られ、住民と共に建築化されていく。これらは地域と住民の継続的な交流関係を構築する。またこれらの関係を Hub 組織が管理することで、支援自治体や創業支援企業と連携して新たなコミュニティを育む。





まちに開かれた住まいの余白空間をみんなで集い囲み、日常のこと、このマチのこと、集住のミライのことを話し合う。他人と語り、考えて、互いの距離感をつくりだしていく、まちのヨリドコロとなる。



間仕切りを取り付け、家具やモノを配置して、他者との共有や占有を繰り返しながら、生活ユニット内外の視線、環境、関係を住み手自身が作りだしていく。集住内部でソトとの境界が形成されていく。



モノの距離感によって、集住の至る所に散りばめられた境界が、職人との共同作業により建築化していき、こうして形成されたカベにはつくり手の愛着が残り、集住に住み手の痕跡が蓄積していく。



他人との関係により生まれたカベは多様な空間利用者によって増減を繰り返していく。建築は手入れされこのイエはイアワセる場として新しいソトとの関係を育み続ける建築としてこの町で生きていく。



- 1 roof design
- 2 pillar design
- 3 unit design i
- 4 unit design ii
- 5 floor design

